



### 中 田 國 太 郎 選 投稿数15首

ゆつくりと歩いてみたり早めたり日差しの中に元気を拾ふ  
 (評) 人は静かに老いていくものである。その老いを日常生活の中で自覚するのは、先ず足からの場合が多いと思う。その「歩む」という視点から日常生活の一齣を素直に切り取り作品化した作者の力量はさすがである。特に結句の「元気を拾ふ」がこの歌の命である。自然の甘い風を吸い、明るい日差しを、自分の足で歩けることが、元気の源なのである。歌人の古泉千樫に「こんな歌がある。「みなぎらふ光のなかに土ふみてわが歩み来ればわが子らみな来つ」新井作、雪山を背景に旅の美しさが漂う。金子作、「八十五才現役」に元気を貰う。塩田作、小さな命を愛しむ。

雪山の光り極まる湯の街に旅納めなる旅情満たしぬ 皆野 新井 愛子  
 長寿ねぎ八十五才現役と手書きのシールで直売に出す 皆野 金子善次郎  
 玄関を入らむとする吾が前に小さな秋蝶に足留まりて 皆野 塩田 千代  
 鬚結えぬ跣の力士走り来る都会の街の冬めく中を 上日野沢 四方田利男  
 娘に賜る羽毛布団は愛こもり冷えし心身温め嬉し 下日野沢 浅見 豊子  
 足萎えし己が心に挑戦の言葉刻みて庭に歩を出づ 金崎 山田 雅子  
 愚痴零し屁つ放り腰で種時けどスタイルの良き大根穫れたり 皆野 新井 茂  
 とりこみあり時遅れたる大根の抜くも漬けるもほどよき太さ 三沢 真下 杏子  
 湯気立って一人の食を時かけて始末にせよと心に聞かせ 三沢 鈴木 キク  
 子等贈る赤い半纏に誕生歌大きな拍手に感無量のわれ 下日野沢 山本ミチノ  
 土の香が好きよ好きよと雀らは空を降りきて狭庭に転ぶ 皆野 笠原三江子  
 健康に過ぎせし日々に感謝して私も走る師走の中を 三沢 新井 民子

### 引 間 豊 作 選 投稿数25句

亡き夫へ安堵を告げて松飾り 金沢 青木富佐子  
 (評) 曆もすでに数え目となった師走。この家庭では既に家を支える主人が他界なされ、家事一切の切り盛りから、世間一般への対応まで一身に引き受けていることも伺える。今年は何となく切つて懸かることもあり、時には亡き主人に縋りたい時もあったのでしようが、何とか乗り切つてきたとの自負。中七の安堵を告げるとの措辞によって、晴々とした気持ちで、新春を祝う松飾りを亡き主人を偲びつつ、手がける様子が読む人を感動を呼ぶ佳句に仕上げたことを称賛。

元朝や傘寿の妻の薄化粧 車窓より山また山の紅葉かな  
 皆野 新井 茂 下日野沢 浅見 好一  
 太極拳揃ふ演舞や寒稽古 年賀書く筆字はなから父に似て  
 上日野沢 四方田利男 下田野 藤原 道男  
 開け放つ部屋にひとひら散り紅葉 毘沙門の山水を汲む紅葉晴  
 下日野沢 引間富美子 三沢 真下 杏子  
 これほどに種の多さよ柚子刻む 軒下にりの字連ねてつるし柿  
 三沢 新井 民子 大淵 金室 富雄  
 遺されし姑の荃石軽からず 紐とけば土産に紅葉仲間入り  
 下田野 中田 久恵 金崎 設楽 武子  
 円良田の池とや山湖鳩遊ぶ 濡れ縁の陽射し恋い来し冬の虫  
 下日野沢 高山 ユウ 三沢 長谷河ソノ

**俳句・短歌を募集**  
 作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して  
 企画課へお寄せください。  
 1人1句、1首に限ります。  
**8日必着**